

3 周囲の人々との関係

Q6 あなたにとって、次の質問（ア～エ）にあてはまる人はどんな人ですか。
あてはまる人を何人でも選び、番号に○をつけてください。

- ア あなたが、気楽に話ができると思うのはどの人ですか。
イ あなたが、悩みを打ち明けられると思うのはどの人ですか。
ウ あなたが、「この人から注意されたら言うことを聞く」と思うのはどの人ですか。
エ あなたが、「こんな人になりたい」と思うのはどんな人物ですか。

(選択肢)

- | | | |
|--------------------|---------------------|---------|
| 1 父親 | 2 母親 | 3 兄弟姉妹 |
| 4 祖父母(おじいさん・おばあさん) | 5 親戚の人 | |
| 6 同性の友達・仲間 | 7 異性の友達・恋人・配偶者(夫や妻) | |
| 8 先輩 | 9 先生 | 10 近所の人 |
| 11 ネット上の友達・知り合い | 12 誰もいない | |
| 13 その他() | | |

注：今回調査では、選択肢11を追加している。

(1) 経年比較等

2-3-1図は、調査対象者が日常的に接している家族や友達など周囲の人々をどのように評価しているか、あるいは、どのような人物を自己の将来のモデル(同一視の対象)として見ているかなど、身近な人間関係に対する捉え方を見るため、ア～エの質問に当てはまる人物として各対象を選択(複数回答)した者の比率(以下この項において「選択率」という。)を経年比較したものである。

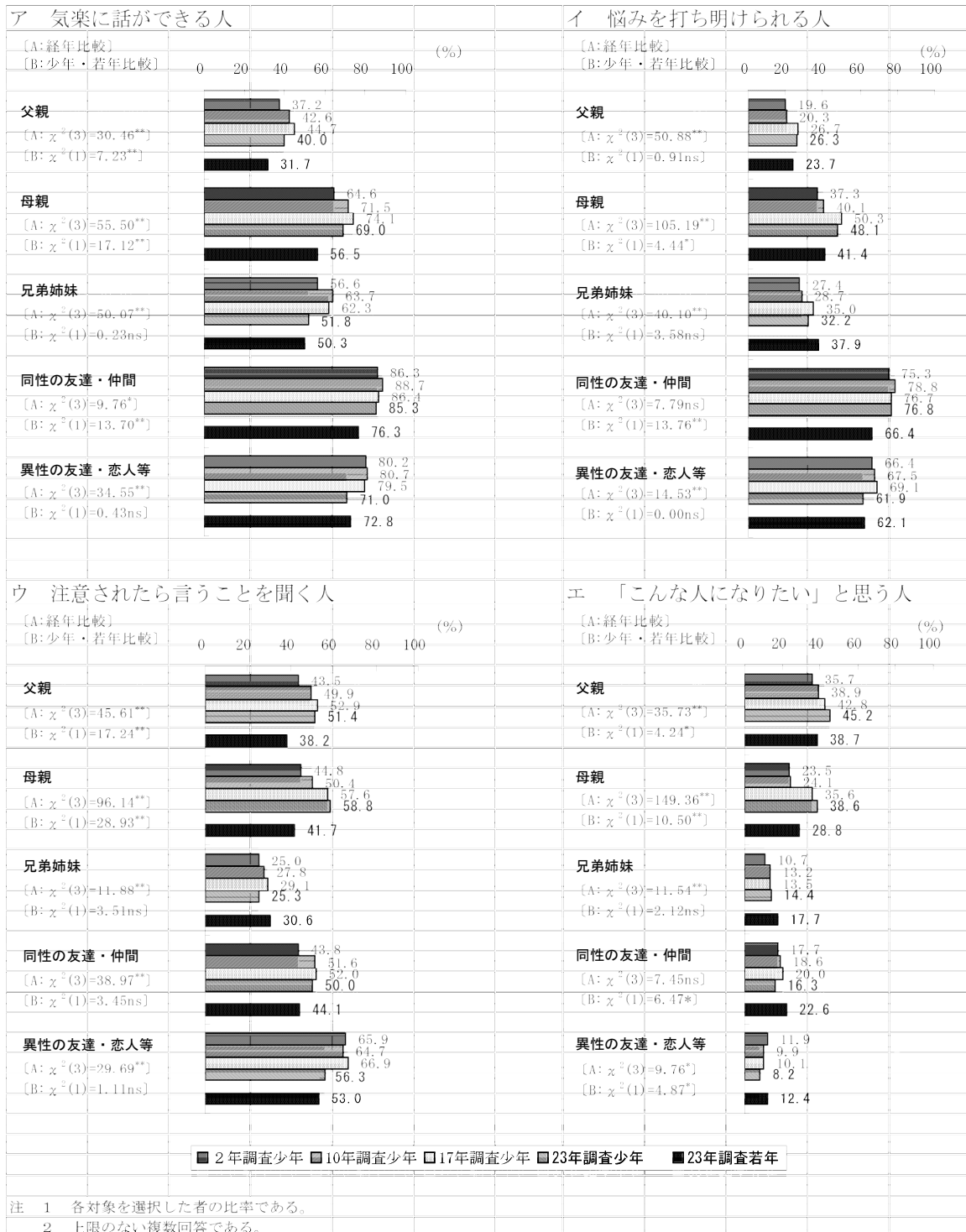
ア 気楽に話ができる人

「あなたが、気楽に話ができると思うのはどの人ですか」という質問に対する回答では、いずれの調査でも、同性の友達・仲間の選択率が最も高く、次いで、異性の友達・恋人等、母親、兄弟姉妹、父親の順となっている。前回の17年調査と比べ、兄弟姉妹、異性の友達・恋人等の選択率が5pt以上低下している。

また、今回調査について、非行少年・若年犯罪者別にこの質問への回答状況を見ると、選択対象の順序は両群で変わらないが、非行少年では、両親や同性の友達・仲間の選択率が若年犯罪者より有意に高い特徴が見られる。これには、両群の年齢差による生活基盤や対人関係の変化も影響していると推察される。

さらに、非行少年の回答を男女別に見ると、男子において、父親を選択する者（男子42.6%、女子20.7%、 $\chi^2(1)=15.35^{**}$ ）、母親を選択する者（男子70.6%、女子57.5%、 $\chi^2(1)=6.19^*$ ）及び兄弟姉妹を選択する者（男子53.3%、女子40.2%、 $\chi^2(1)=5.28^*$ ）の比率が有意に高いという特徴が見られ、女子において家族間のコミュニケーションに問題を抱える者が多い可能性が示唆される。

2-3-1図 周囲の人々との関係（経年比較等）



イ 悩みを打ち明けられる人

「あなたが、悩みを打ち明けられると思うのはどの人ですか」という質問に対する回答では、いずれの調査でも、同性の友達・仲間の選択率が最も高く、次いで、異性の友達・恋人等、母親、兄弟姉妹、父親の順であった。17年調査と比べ選択率に5pt以上の差が見られた対象は、異性の友達・恋人等であり、今回は低下している。

次に、今回調査について、非行少年・若年犯罪者別にこの質問への回答状況を見ると、両群で選択対象別の選択率の順序は変わらないが、非行少年において、母親や同性の友達・仲間の選択率が若年犯罪者より有意に高い。こうした傾向にも、両群の年齢差による生活基盤や対人関係の変化が影響していると推察される。

また、非行少年の回答を男女別に見ると、父親の選択率が男子で有意に高く（男子28.0%，女子13.8%， $\chi^2(1)=7.97^{**}$ ）、同性の友達・仲間の選択率が女子で有意に高かった（男子75.6%，女子86.2%， $\chi^2(1)=4.86^*$ ）。

ウ 注意されたら言うことを聞く人

「あなたが、『この人から注意されたら言うことを聞く』と思うのはどの人ですか」という質問に対する回答は、前回までの調査では異性の友達・恋人等の選択率が最も高かったが、今回は母親が最も高くなっており、ここでも異性の友達・恋人等の低下傾向が大きい。

ただし、今回調査について、非行少年・若年犯罪者別にこの質問への回答状況を見ると、若年犯罪者では、異性の友達・恋人等の選択率が最も高く、これに次いで、同性の友達・仲間、母親、父親、兄弟姉妹の順となっており、若年犯罪者では、加齢に伴い出身家庭の家族よりも同世代の仲間や交際相手等の影響が相対的に大きくなっていることがうかがえる。

なお、この質問に対する非行少年の回答を男女別で見ると、男子において父親の選択率が有意に高く（男子53.7%，女子34.5%， $\chi^2(1)=11.28^{**}$ ）、男子の方が、父親を権威像として肯定的に捉える傾向にあることがうかがえる。

エ 「こんな人になりたい」と思う人

「あなたが、『こんな人になりたい』と思うのはどんな人物ですか」という質問に対する回答では、いずれの調査においても父親の選択率が最も高く、父親や母親の選択率は経年で上昇傾向にある。

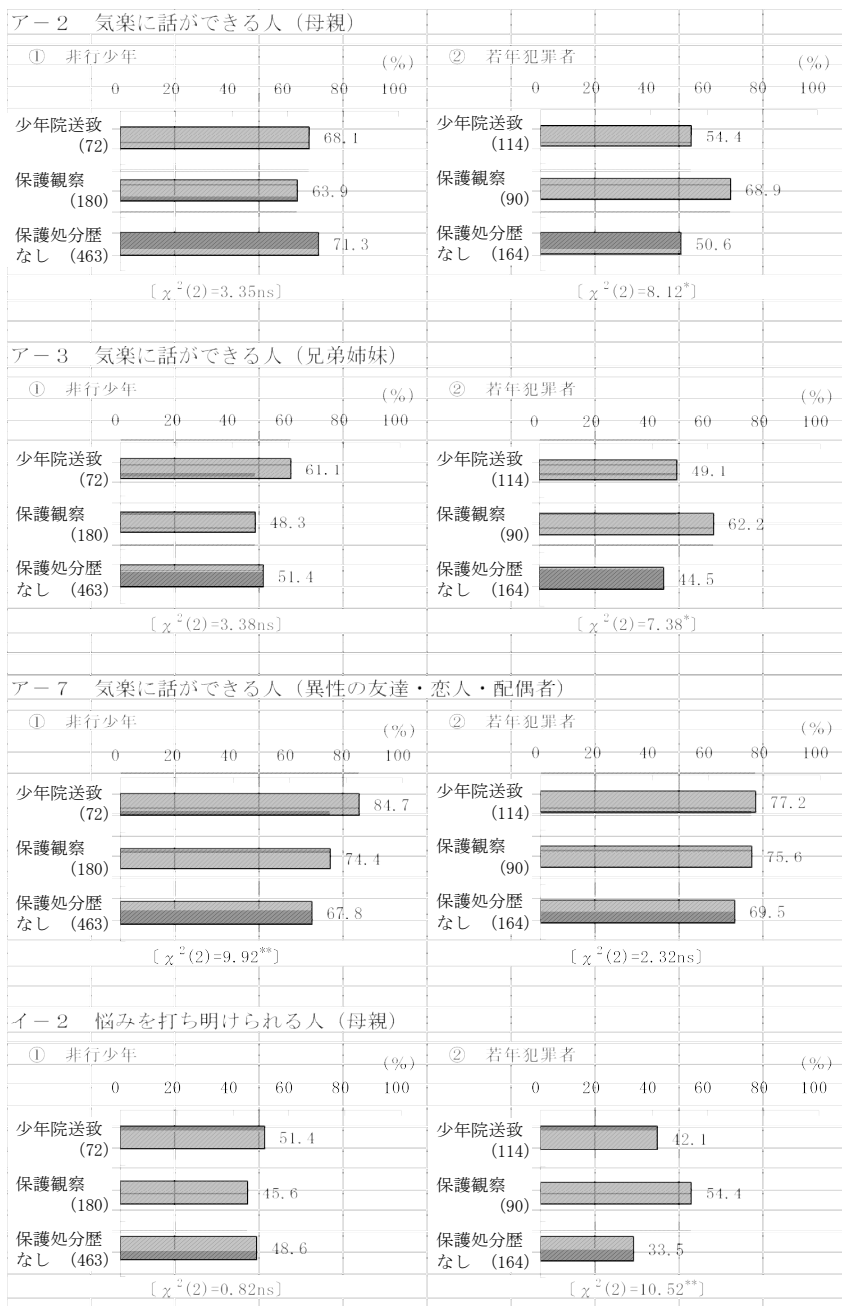
次に、今回調査について、非行少年・若年犯罪者別にこの質問への回答状況を見ると、若年犯罪者では、選択される対象の選択率の高さの順序は非行少年と同じであり、若年犯罪者においても親が将来のモデル（同一視の対象）として最も重視されていることがうかがえる。ただし、若年犯罪者においては、父母の選択率が非行少年より有意に低く、同性の友達・仲間や異性の友達・恋人等の選択率が有意に高い傾向にあり、ここでも加齢に伴い出身家庭外の対人関係の影響が相対的に大きくなっていることがうかがえる。

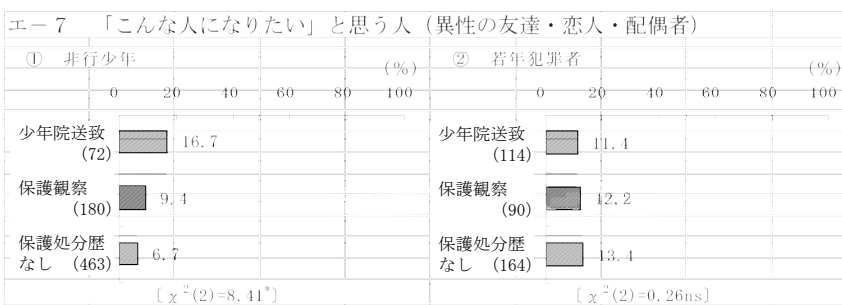
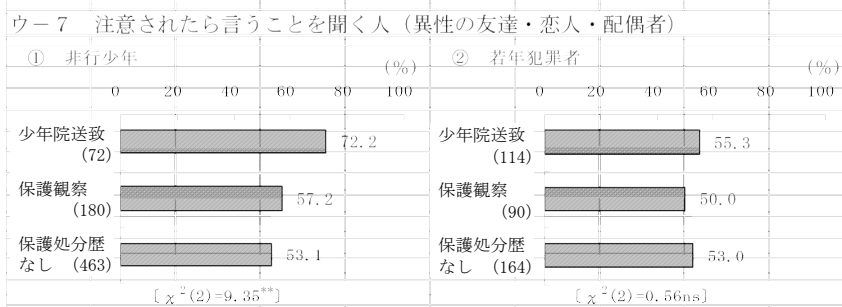
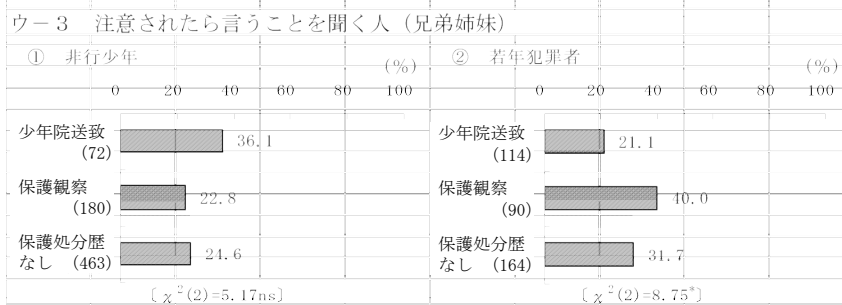
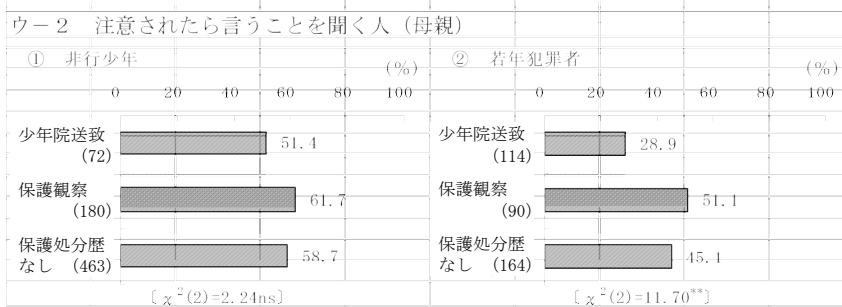
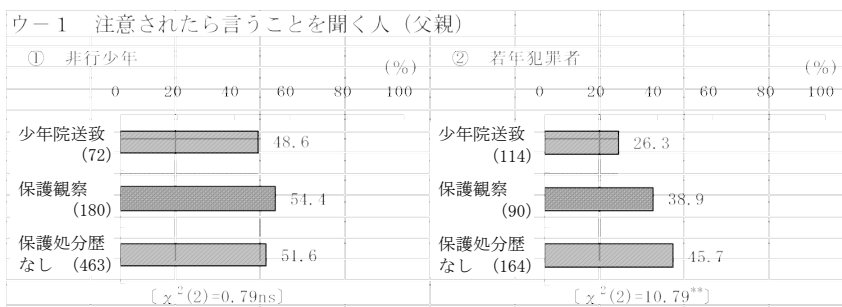
さらに、非行少年の回答を男女別で見ると、男子において父親の選択率が有意に高く(男子49.0%, 女子17.2%, $\chi^2(1)=31.18^{**}$), 女子において母親の選択率が有意に高い(男子35.8%, 女子59.8%, $\chi^2(1)=18.62^{**}$) 傾向が認められ、同性の親が、肯定的な同一視のモデルと認知されていることがうかがえる。

(2) 保護処分歴別の比較

2-3-2図は、今回調査において、非行少年・若年犯罪者別、保護処分歴別にクロス集計を行い、有意差が認められたものを抜粋して示したものである。

2-3-2図 周囲の人々との関係(保護処分歴別)





注 1 各項目を選択した者の比率である。
 2 () 内は、保護処分歴別の総数である。

非行少年で少年院送致歴を有する者では、気楽に話ができる対象として、異性の友達・恋人等を選択した者の比率が有意に高く（ア－7①参照）、注意されたら言うことを聞く対象としても、異性の友達・恋人等が有意に高く選択される傾向にあり（ウ－7①参照）、さらに、こんな人になりたいと選択される対象も異性の友達・恋人等を選択する者が他の保護処分歴区分の者より有意に高い（エ－7①参照）。総じて、少年院送致歴を有する者の場合、家庭外の異性の友達・恋人等をよりどころとする傾向が高いことがうかがえる。

一方、若年犯罪者を保護処分歴別に見ると、保護処分歴なしの者においては、注意されたら言うことを聞く対象として父親を選択する者の比率が有意に高い傾向が見られ（ウ－1②参照）、少年時に保護処分歴がなく経過した若年犯罪者では、他の区分の者に比べ父親を権威像として認識してきた者が比較的多いことがうかがえる。また、少年時に保護観察歴を有する者では、悩みを打ち明けられる対象として母親を選択する者の比率（イ－2②参照）が有意に高く、また、気楽に話ができる対象として母親（ア－2②参照）や兄弟姉妹（ア－3②参照）を選択する者の比率が有意に高いことに加え、注意されたら言うことをきく対象としても母親（ウ－2②参照）や兄弟姉妹（ウ－3②参照）を選択する者の比率が有意に高い。すなわち、少年時に保護観察歴を有する者では、身近な家族が比較的準拠枠となる存在として認識されてきたことがうかがえる。他方、少年院送致歴を有する者では、注意をされて言うことを聞く対象として、父母（ウ－1, 2②参照）や兄弟姉妹（ウ－3②参照）を選択する者の比率が有意に低く、親など身近な家族が準拠枠として認知されない傾向が比較的高いことがうかがえる。

4 学校生活に対する意識

Q7 あなたの中学時代や高校時代の学校生活についてうかがいます。

(高校に入ったことのある人はあなたの高校生活について教えてください。それ以外の人は、あなたの中学校生活について教えてください。)

あなたがその学校の生徒や学生だったとき、次のこと（ア～キ）がどれくらいありましたか。次の中から、ひとつだけ選んで番号を記入してください。

- ア 学校に行くのがいやだった
- イ 勉強が分からないことが多かった
- ウ クラブ活動などうちこめるものがあった
- エ 先生から理解されていた
- オ 同級生から理解されていた
- カ 学校ではひとりぼっちや仲間はずれになっていた
- キ 周りから悪く思われていた

(選択肢)

- | | | | | | | | |
|---|-------|---|-------|---|---------|---|---------|
| 1 | とても | 2 | やや | 3 | あまり | 4 | まったく |
| | あてはまる | | あてはまる | | あてはまらない | | あてはまらない |

(1) 経年比較等

本質問中、アは17年調査と同じ項目を使用している（ただし、今回は中学校生活に限定した質問であり、今回は中学校又は高校の直近の学校生活経験を質問しているため、厳密な比較はできない。）。参考までに、今回調査と17年調査を比較すると、「学校に行くのがいやだった」に「あてはまる」（「とてもあてはまる」及び「ややあてはまる」の合計。以下同じ。）と回答した者の比率（以下この項において「該当率」という。）は、平成17年が47.0%、今回は46.4%であり、該当率に有意差はない（ $\chi^2(1)=0.09ns$ ）。前回は今回も半数近くの者が学校生活に対して否定的な態度を有している。

次に、非行少年と若年犯罪者を比較する。非行少年では、8割を超える者が「勉強が分からないことが多かった」に該当しており、「学校に行くのがいやだった」の該当率も上述のとおり半数近くに及ぶ。また、学校内の対人関係では、「同級生から理解されていた」に対する肯定的回答は7割を超え、同世代の者との関係は比較的良好な印象を持っていることがうかがえるが、「周りから悪く思われていた」の該当率も5割程度に及んでおり、学校生活に対する不適応感を持つ者や対人関係に十分な肯定感が持てていなかった者が多いことがうかがえる。一方、若年犯罪者では、「勉強が分からないことが多かった」の該当

率が非行少年より有意に低い。学校内の対人関係に関する項目では、先生や同級生から理解されていたとする者の比率は非行少年より有意に低く、若年犯罪者の方が、在学時の対人的な疎外感が大きく、否定的な記憶となって残っていることがうかがえる。

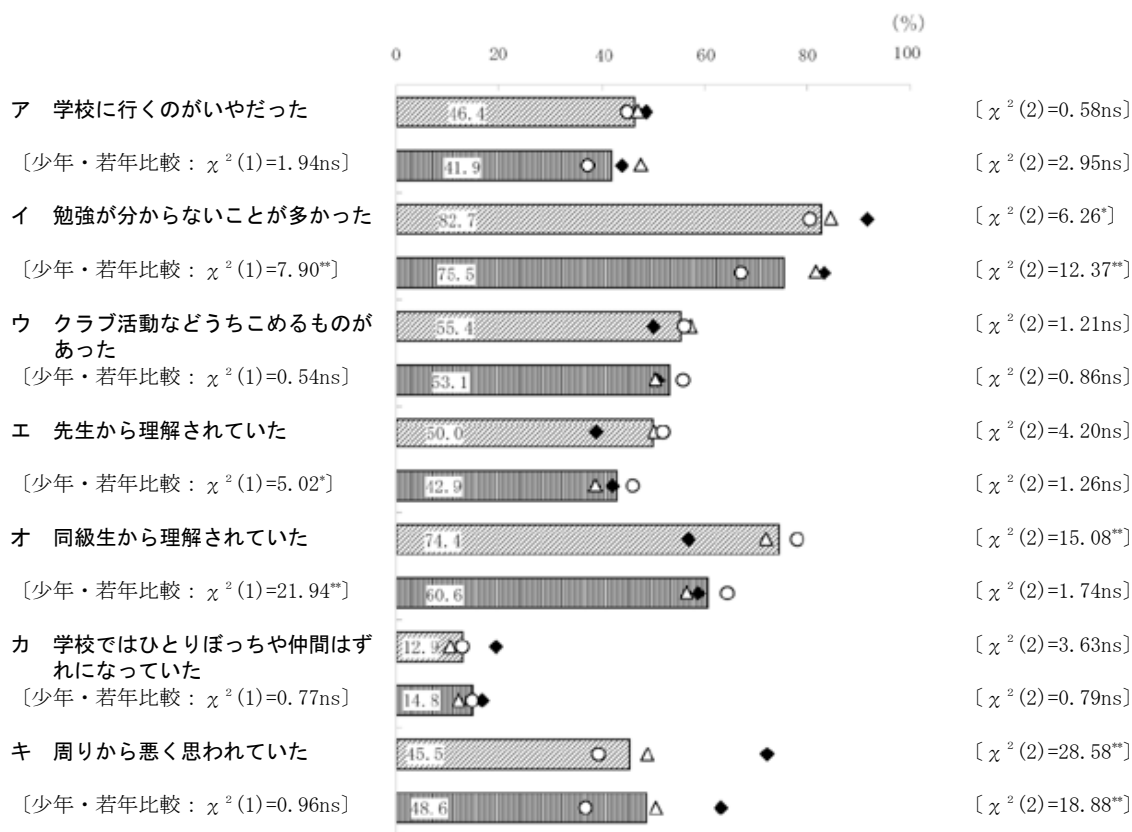
また、非行少年について男女別の回答状況を見ると、女子においては、「学校に行くのがいやだった」の該当率が有意に高く（男子43.1%、女子70.1%、 $\chi^2(1)=22.44^{**}$ ）、「クラブ活動などうちこめるものがあつた」の該当率が有意に低い（男子58.3%、女子34.5%、 $\chi^2(1)=17.56^{**}$ ）。また、「学校ではひとりぼっちや仲間はずれになっていた」の該当率は有意に高く（男子11.2%、女子25.3%、 $\chi^2(1)=13.46^{**}$ ）、女子では、学校生活に対し不適応感を持つ者の割合が、男子に比べ比較的高いことがうかがえる。

（2）保護処分歴別の比較

本質問中、イ～キまでの項目は、今回新設したものであり、**2-4-1**図は、アに対する回答を含め、非行少年・若年犯罪者別、保護処分歴別の該当率を示したものである。

非行少年の場合、保護処分歴による有意差が認められた項目は、イの「勉強が分からないことが多かった」（少年院送致歴を有する者では9割を超える）、オの「同級生から理解されていた」（少年院送致歴を有する者では該当率が6割にも満たない）、キの「周りから悪く思われていた」（少年院送致歴を有する者では7割を超える）であった。つまり、非行少年を保護処分歴別に見ると、保護処分歴のない者の学校適応に関する自己評価は比較的良好であるのに対し、少年院送致歴を有する者では、学業についていけない一方で、対人的な疎外感も大きかったと自己評価する者が多く、総じて学校生活に対する不適応感が大きかったことがうかがえる。

2-4-1 図 中学生生活・高校生活（保護処分歴別）



■ 非行少年	■ 若年犯罪者	◆ 少年院送致	△ 保護観察	○ 保護処分歴なし
注 1 「とてもあてはまる」及び「ややあてはまる」を合計した比率である。				
注 2 無回答の者を除く。				
注 3 χ^2 検定結果のうち、右側は保護処分歴別の検定結果を示している。				

一方、若年犯罪者においては、イの「勉強が分からないことが多かった」において、少年院送致歴を有する者の該当率が8割を超え、保護処分歴なしの者より有意に高いこと、キの「周りから悪く思われていた」についても、少年院送致歴を有する者は6割を超え、対人的な疎外感も比較的大きいという特徴があり、少年期に非行が比較的進行していたと見られる若年犯罪者においては、学校不適応が比較的大きな影響を与えてきたことがうかがえる。

5 就労に対する意識

Q8 働くことや仕事について、あなたの考えをうかがいます。

次の中から、自分にもっともあてはまる番号をひとつ選んで番号を記入してください。

- ア 学校を卒業したら、できるだけ早く就職して、親から自立すべきだ
- イ 汗水流して働くより、楽に金を稼げる仕事がしたい
- ウ 自分のやりたい仕事が見つからなければ働かなくてもよい
- エ フリーターや派遣社員は、長期間続けるべき仕事ではない
- オ 仕事や就職に役立つ資格や免許は苦勞しても取りたい
- カ 職場の人間関係は面倒くさい
- キ 努力すれば、満足できる地位や収入は得られるものだ
- ク 仕事について夢や目標を持っている

(選択肢)

- | | | | | | | | |
|---|------|---|----------|---|----------|---|--------|
| 1 | とても | 2 | どちらかといえば | 3 | どちらかといえば | 4 | ぜんぜん |
| | そう思う | | そう思う | | そう思わない | | そう思わない |

本質問は、就労に対する意識を検討するため、今回新設したものであり、2-5-1図は、各項目に対して肯定的回答（「とてもそう思う」及び「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ。）をした者の比率（以下この項において「賛成率」という。）を、非行少年・若年犯罪者別、保護処分歴別に見たものである。

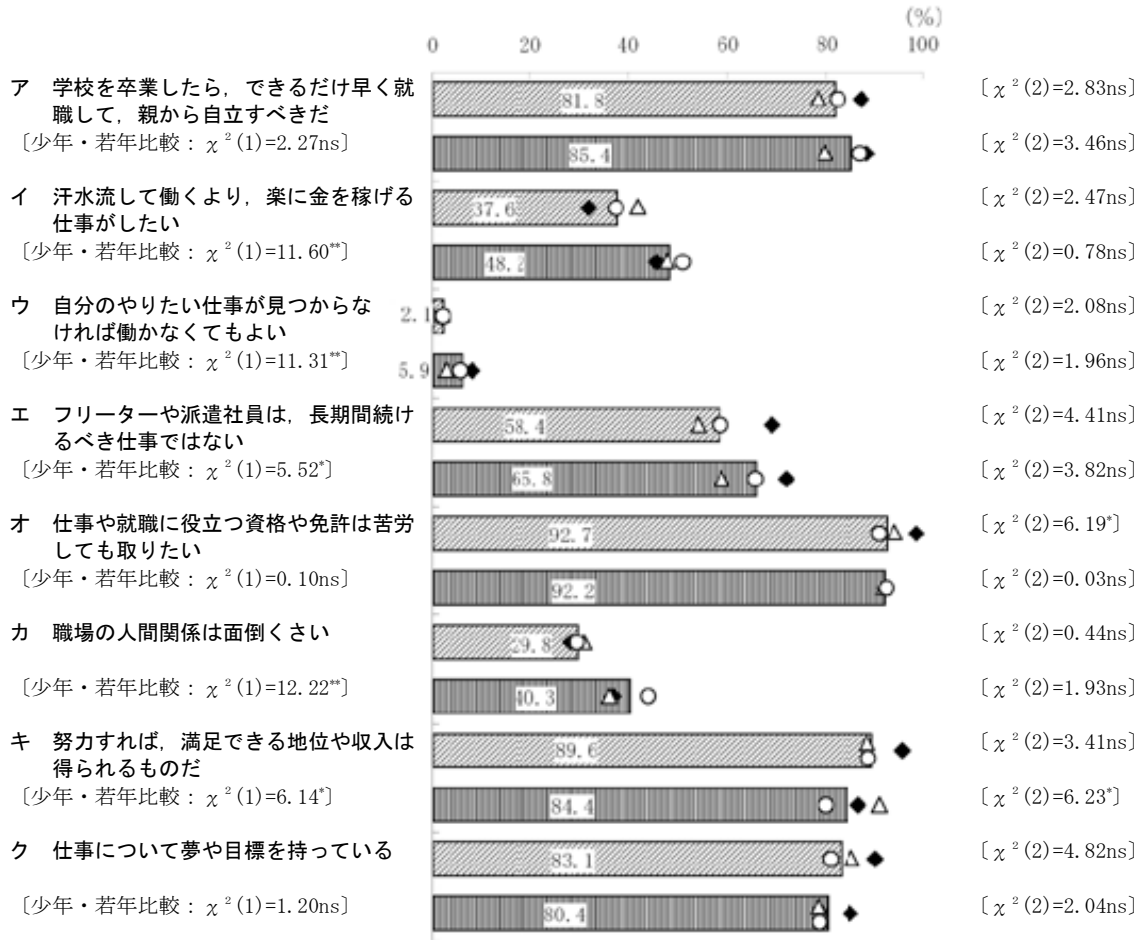
非行少年では、学校卒業後の就職や自立について、約8割を超える者が「早く就職して、親から自立すべきだ」という項目に肯定的な態度を示している。また、「仕事について夢や目標を持っている」、「努力すれば、地位や収入は得られる」、「資格や免許は苦勞しても取りたい」にも8割から9割に及ぶ高い割合で肯定的な反応が見られる。総じて、非行少年では、就労を通じた社会的自立については前向きな意欲を持つ者が多いといえる。ただ

し、「楽に稼げる仕事がしたい」という安直な志向を示す者が約4割に及び、「職場の人間関係は面倒くさい」と感じる者も3割程度存在する。

また、非行少年について、男女別に各項目への賛成率を見ると、「早く就職して、自立すべきだ」（男子80.6%、女子90.8%、 $\chi^2(1)=5.34^*$ ）及び「職場の人間関係は面倒くさい」（男子27.3%、女子48.8%、 $\chi^2(1)=16.10^{**}$ ）に有意差が認められ、女子の方が自立志向が高い反面、職場の人間関係に困難を感じる者も多いことが認められる。

なお、非行少年の各項目への賛成率を保護処分歴別に見ると、「仕事や就職に役立つ資格や免許は苦勞しても取りたい」のみに有意差が認められ（ $\chi^2(1)=6.19^*$ ）、少年院送致経験のある者では、ほぼ全員に近い者が資格や免許の取得意欲を示しており、資格・免許の取得をより切実な課題として認識していることがうかがえる。

2-5-1 図 就労に対する意識（保護処分歴別）



■ 非行少年	■ 若年犯罪者	◆ 少年院送致	△ 保護観察	○ 保護処分歴なし
注 1	「とてもあてはまる」及び「ややあてはまる」を合計した比率である。			
注 2	無回答の者を除く。			
注 3	χ^2 検定結果のうち、右側は保護処分歴別の検定結果を示している。			

一方、若年犯罪者では、非行少年と同様に、就労を通じた自立に8割を超える者が肯定的な態度を示している。不安定な雇用に否定的な態度を示す者の比率（「フリーターや派遣社員は続けるべきではない」への賛成率）は、非行少年より有意に高く、安定的雇用に志向する者の割合が高い。しかし、その一方で、「楽に稼げる仕事がしたい」を肯定する者が半数近くに及び、「職場の人間関係は面倒くさい」への賛成率も4割程度、「自分のやりたい仕事が見つからなければ働かなくてもよい」への賛成率も、絶対数は少ないものの非行少年よりも有意に高く、仕事に対する意欲や対人関係、職業観に問題を抱える者も少なくないことがうかがえる。

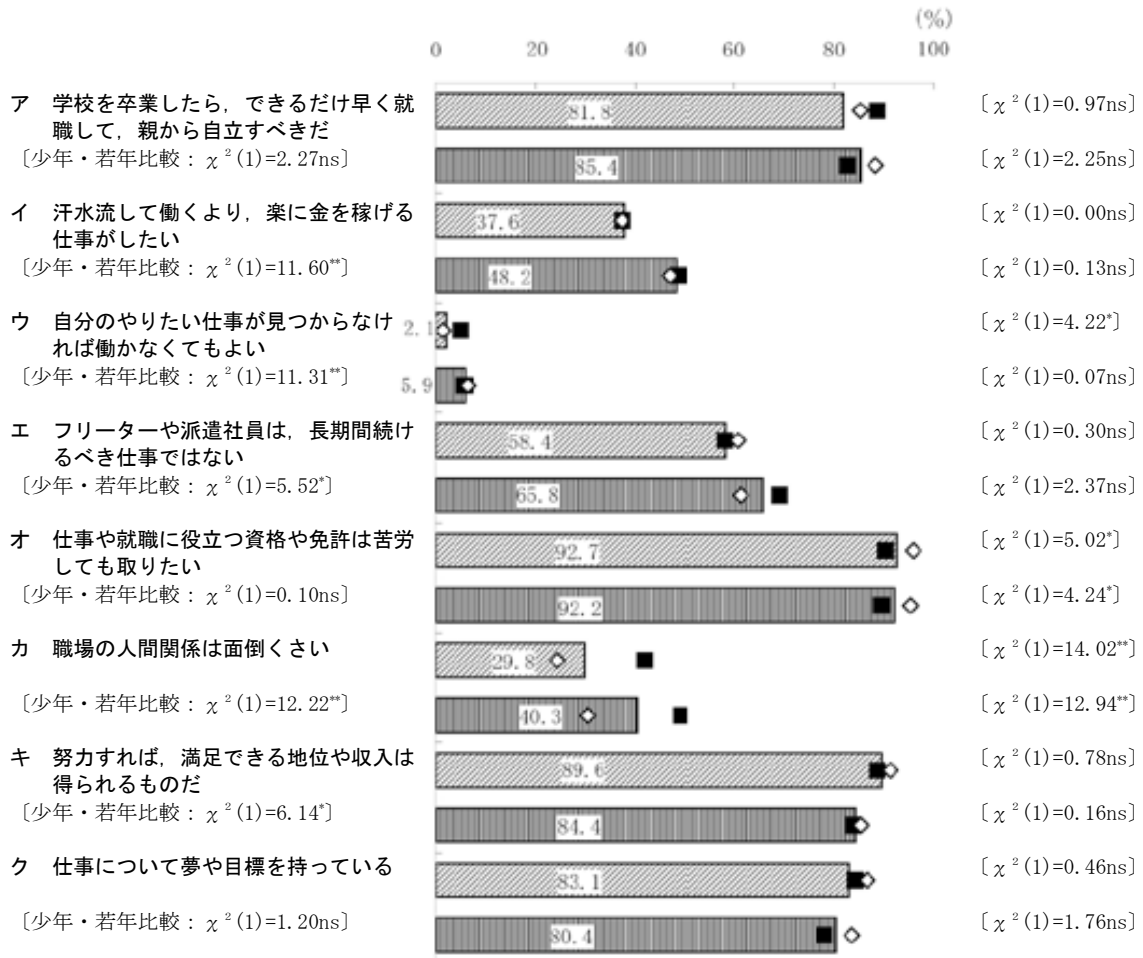
また、若年犯罪者を男女別に見ると、「汗水流して働くより、楽に金を稼げる仕事がしたい」にのみ有意差が認められ（男性49.6%、女性27.3%、 $\chi^2(1)=4.12^*$ ）、女性に比べ男性においては安直な職業観を有する者が多い特徴が見られる¹。

さらに、若年犯罪者について、保護処分歴別の賛成率の差を見ると、「努力すれば満足できる地位や収入が得られるものだ」にのみ有意差が認められ（ $\chi^2(1)=6.23^*$ ）、保護処分歴のない若年犯罪者の賛成率が低く、これらの者では、就労を通じた社会的達成に消極的な態度を示す者が比較的多いことがうかがわれる。

2-5-2図は、非行少年・若年犯罪者別、非行・犯行時の有職・無職の別に、各項目への賛成率を見たものである。非行・犯行時に無職であった者においては、「職場の人間関係が面倒くさい」に肯定的な回答を示す者の比率が4割から5割程度に及び（非行少年41.8%、若年犯罪者49.0%）、有職であった者（非行少年24.3%、若年犯罪者30.4%）の賛成率に比べて際立って高くなっており、無職者では、単に仕事を得られていないだけでなく、対人関係に忌避的であるなど、対人面での課題を抱える者が少なくないこともうかがえる。

1 若年犯罪者中、女性の調査対象者数が少ないので、その点に留意する必要がある。

2-5-2図 就労に対する意識（就労状況別）



非行少年	若年犯罪者	無職	有職
注 1 「とてもそう思う」及び「どちらかといえばそう思う」を合計した比率である。			
注 2 学生・生徒、家事従事者及び無回答の者を除く。			
注 3 χ^2 検定結果のうち、右側は保護処分歴別の検定結果を示している。			

6 地域社会に対する意識

Q9 あなたの住んでいた地域とのかかわりで、次のことがどれくらいあてはまりますか。

次の中から、自分にもっともあてはまる番号をひとつ選んで記入してください。

- ア 地域のお祭りなど行事にはよく参加した
- イ 地域のスポーツ活動によく参加した
- ウ 公園のそうじなどの地域のボランティア活動によく参加した
- エ 地域の方は、困ったときに力になってくれる
- オ 地域の方が喜ぶようなことをしてあげたい

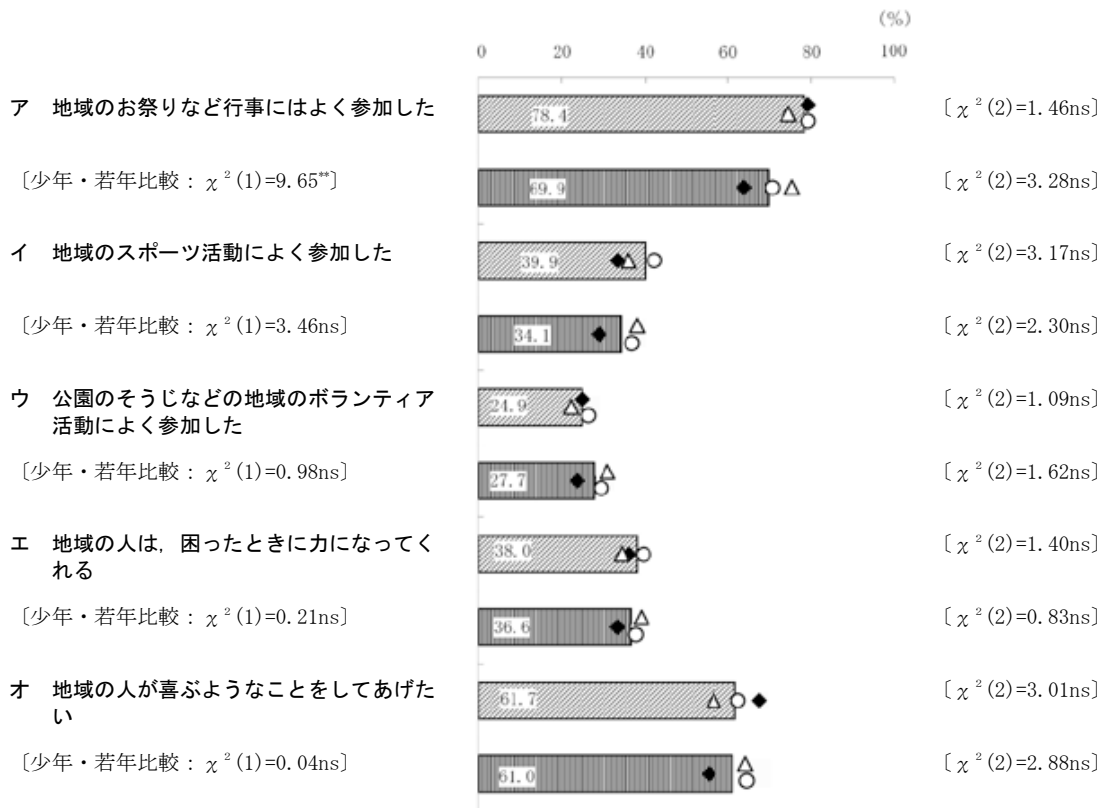
(選択肢)

- | | | | | | | | |
|---|-------|---|-------|---|---------|---|---------|
| 1 | とても | 2 | やや | 3 | やや | 4 | まったく |
| | あてはまる | | あてはまる | | あてはまらない | | あてはまらない |

2-6-1図は、地域社会との関係等についての質問に対し、「とてもあてはまる」又は「ややあてはまる」と回答した者の比率（以下この項において「該当率」という。）を非行少年・若年犯罪者別、保護処分歴別に示したものである。地域参加体験の程度（ア～ウ）は、非行少年及び若年犯罪者の双方でほぼ同様な傾向が示されており、地域の祭り等の行事には、非行少年の約8割、若年犯罪者の約7割の者が、参加体験があると回答しており比較的参加経験が多い。これに対し、地域のスポーツ活動への参加は3割台、ボランティア活動への参加は2割台であり、その経験者は少なくなっている。一方、エの「地域の方は、困ったときに力になってくれる」への該当率（地域からの人的支援に信頼を示す者の割合）は、約4割にとどまるが、オの「地域の方が喜ぶようなことをしてあげたい」への該当率（地域貢献に意欲的態度を示す者の割合）は約6割に及んでいる。

これらの回答状況を非行少年・若年犯罪者別に比較すると、非行少年の方が若年犯罪者よりも、祭りなどの行事への参加に関する該当率が有意に高いことが認められる。また、非行少年を男女別に見ると、地域のスポーツ活動への参加に関する該当率が女子において男子より有意に低く（男子41.3%、女子29.9%、 $\chi^2(1)=4.13^*$ ）、オの地域貢献態度も女子が男子より有意に低い（男子63.0%、女子51.7%、 $\chi^2(1)=4.12^*$ ）といった特徴が認められた。各項目に対する保護処分歴別の該当率には有意差は見られなかった。

2-6-1 図 地域社会との関係（保護処分歴別）



注 1 「とてもあてはまる」及び「ややあてはまる」を合計した比率である。
 2 無回答の者を除く。
 3 χ^2 検定結果のうち、右側は保護処分歴別の検定結果を示している。

本質問中、ア～ウは、過去の地域活動参加体験に関する主観的評価であり、エは地域からの人的支援への信頼に関する現在の信条、オは現在の地域貢献に対する態度を示す質問項目と考えられることから、過去の体験ア～ウと現在の信条エ及び現在の態度オとの関連性をここで検討する。2-6-3表①は、非行少年及び若年犯罪者の調査サンプル全体について、過去の地域活動参加体験ア～ウに関する主観的評価（各項目への回答を肯定的方向の回答と否定的方向の回答とに折半し、2値データ化したもの）を説明変数とし、地域からの人的支援に関する現在の信条エに関する主観的評価（同じく2値データ化したもの）を目的変数としたロジスティック回帰分析の結果である。この結果によれば、各種の地域活動参加の体験は、いずれの参加体験も地域からの人的援助に関する信頼を統計的に有意に高めるが、その効果は、他の条件が一定の場合、オッズ比（Exp(B)）から見て、祭りなどへの行事の参加よりも、より能動的な参加が求められるスポーツ活動や、地域貢献への直接的な関連性が高いと考えられる地域のボランティア活動の方が、地域からの人的援助に関する信頼をより大きく高める方向に影響することがうかがえる。

2-6-3表① 地域からの人的支援信頼（エ）を目的変数とし、地域活動参加体験（ア～ウ）を説明変数とする2項ロジスティック回帰分析結果

	B	標準誤差	Wald	自由度	p	Exp(B)
ア 祭り等参加体験	0.41	0.17	5.65	1	0.02	1.51
イ スポーツ参加体験	0.71	0.15	23.79	1	0.00	2.03
ウ ボランティア参加体験	1.07	0.15	47.78	1	0.00	2.90
定数	-2.96	0.33	82.58	1	0.00	0.05

注 非行少年及び若年犯罪者の全てのデータを使用した強制投入法による2項ロジスティック回帰分析結果である。

2-6-3表②は、①と同様に、地域貢献に対する態度オを目的変数とし、地域参加体験ア～ウ及び地域の人的支援に対する信頼エを説明変数としてロジスティック回帰分析を行った結果である。地域貢献に対する態度には、他の条件が一定の場合、オッズ比（Exp(B)）から見て、地域の祭り等の行事参加体験は関連せず、スポーツ活動や地域ボランティア活動のようなより能動的な参加が求められる体験が、地域貢献に対する肯定的態度により大きな影響を与え、地域からの人的支援に対する信頼がある場合に、地域貢献の態度はより大きく肯定的な方向に傾くことがうかがえる。

2-6-3表② 地域貢献態度(オ)を目的変数とし、地域活動参加体験(ア～ウ)及び地域からの人的支援信頼(エ)を説明変数とする2項ロジスティック回帰分析結果

	B	標準誤差	Wald	自由度	p	Exp(B)
ア 祭り等参加体験	0.15	0.17	0.84	1	0.36	1.16
イ スポーツ参加体験	0.52	0.17	9.71	1	0.00	1.69
ウ ボランティア参加体験	1.00	0.20	24.04	1	0.00	2.72
エ 地域の人的支援信頼	2.13	0.19	132.65	1	0.00	8.39
定数	-6.97	0.51	183.91	1	0.00	0.00

注 非行少年及び若年犯罪者の全てのデータを使用した強制投入法による2項ロジスティック回帰分析結果である。

7 社会に対する意識

Q10 あなたは、今の社会についてどのくらい満足していますか。

次の中から、ひとつだけ選んで番号を記入してください。

- 1 満足 2 やや満足 3 どちらとも言えない 4 やや不満 5 不満

Q10b 上の質問で「4 やや不満」、「5 不満」の答えの人だけ教えてください。

「やや不満」、「不満」ということですが、それはどういう理由からですか。

次の中であてはまるものを、いくつでも選び番号の欄に○をつけてください。

- 1 社会のしくみがきまりきっている
- 2 若者の意見が反映されない
- 3 正しいと思うことが通らない
- 4 国民の意見がまとまっていない
- 5 金持ちと貧乏な人との差が大きすぎる
- 6 まじめな者がむくわれない
- 7 人々の考え方や行動が乱れている
- 8 その他 ()

(1) 社会に対する満足度

ア 経年比較等

2-7-1図は、現在の社会に対する満足度を見たものである。経年比較で見ると、社会に対して「満足」（「満足」及び「やや満足」の合計。以下同じ。）と回答した者の構成比は、非行少年ではおおむね4割弱の水準で推移しており、経年における有意差は認められず、社会に対する満足度に大きな変化は生じていない。

また、非行少年と若年犯罪者を比較すると、若年犯罪者では、社会に対して「満足」と

回答した者の構成比は非行少年の半分以下で有意に低く、現在の社会が不満（「不満」及び「やや不満」の合計。以下同じ。）と回答した者の構成比は4割程度で、非行少年より有意に高い。

さらに、男女別で比較すると、非行少年においては、女子の方が現在の社会に対して「満足」と回答した者の構成比が有意に低いことが認められたが(男子38.9%，女子24.4%， $\chi^2(2)=6.83^{**}$)，若年犯罪者においては、男女間に有意差は認められなかった（男性14.9%，女性27.3%， $\chi^2(2)=2.78ns$ ）²。

2-7-1図 社会に対する満足度（経年比較等）

	満足	どちらとも言えない	不満
2年調査少年（2,093）	35.8	42.7	21.5
10年調査少年（2,251）	32.9	42.8	24.3
17年調査少年（2,860）	33.9	42.2	23.8
23年調査少年（721）	37.2	41.1	21.8
〔経年比較： $\chi^2(6)=9.97ns$ 〕			
23年調査若年（372）	15.6	46.2	38.2
〔少年・若年比較： $\chi^2(2)=63.97^{**}$ 〕			
注 1 「満足」は、「満足」及び「やや満足」を合計した比率であり、「不満」は、「不満」及び「やや不満」を合計した比率である。			
2 無回答の者を除く。			
3 （ ）内は、回答者数である。			

2 ここでも、若年犯罪者中、女性の調査対象者数が少ない点に注意が必要である。

イ 保護処分歴別の比較

2-7-2図は、現在の社会に対する満足度を非行少年・若年犯罪者別、保護処分歴別に見たものである。非行少年、若年犯罪者のいずれにおいても、保護処分歴別の有意差は見られない。

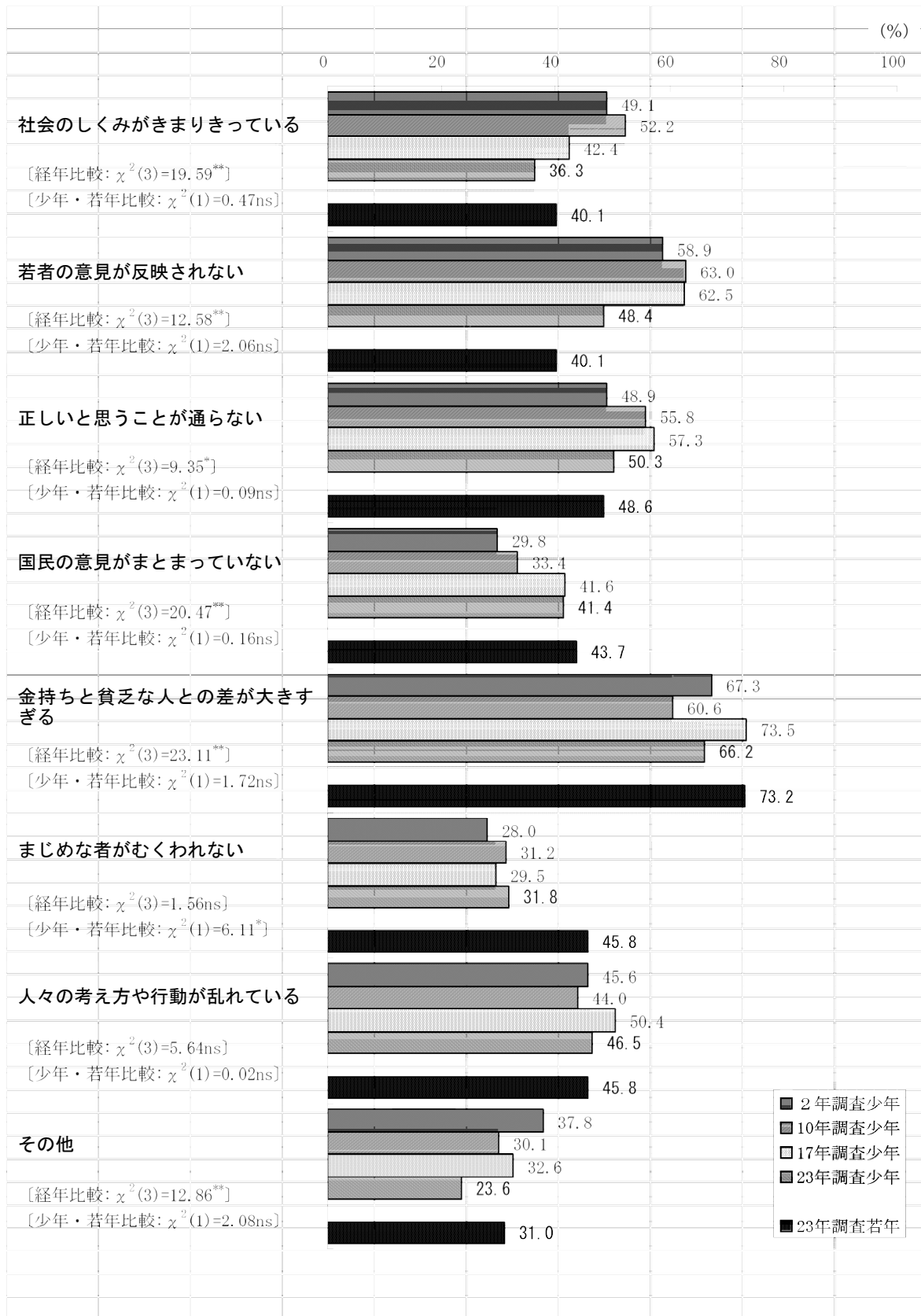
2-7-2図 社会に対する満足度（保護処分歴別）

① 非行少年		満足	どちらとも言えない	不満
少年院送致 (71)		40.8	38.0	21.1
保護観察 (177)		39.5	37.3	23.2
保護処分歴なし (458)		36.2	42.1	21.6
[$\chi^2(4)=1.63ns$]				
② 若年犯罪者		満足	どちらとも言えない	不満
少年院送致 (114)		19.3	40.4	40.4
保護観察 (90)		15.6	53.3	31.1
保護処分歴なし (164)		12.2	46.3	41.5
[$\chi^2(4)=5.82ns$]				
注 1 「満足」は、「満足」及び「やや満足」を合計した比率であり、「不満」は、「不満」及び「やや不満」を合計した比率である。				
2 無回答の者を除く。				
3 () 内は、回答者数である。				

(2) 社会に対する不満の理由

現在の社会が不満と回答した者の中で、主要な理由を見ると、「金持ちと貧乏な人との差が大きすぎる」が非行少年でも若年犯罪者でも最も多く、不満と回答した者の6割を超える。これに次いで「正しいと思うことが通らない」、「人々の考え方や行動が乱れている」が不満と回答した者の半数程度などとなっており、所得の格差や社会的正義・倫理の乱れを不満の理由として挙げる者が比較的多い。

2-7-3図 社会に対する不満の理由（経年比較等）



注 1 Q10において「不満」（「不満」及び「やや不満」）と回答した者に占める各項目を選択した者の比率である。
 2 上限のない複数回答である。
 3 「その他」は、不景気で仕事がない、政治がまとまっていない等である。

(3) 社会に対する満足度と他領域における満足度との関連

社会一般に対する満足度は、日常生活における様々な側面で得られる満足感の影響を受けていると考えられる。2-7-4表は、非行少年及び若年犯罪者について、家庭生活に対する満足度(Q1)、友人関係に対する満足度(Q3)及び自分の生き方への満足度(Q27)を説明変数とし、社会生活の満足度(Q10)を従属変数とするカテゴリカル回帰分析結果を要約したものである。社会への満足度は、生活の基盤をなす家庭生活における満足度、友人関係に対する満足度、自分の生き方に対する満足度のそれぞれに統計的に有意な関連性をもっており、各領域において満足度の高い者は社会生活の満足度も高い傾向にあることがうかがえる。

2-7-4表 今の社会への満足度についてのカテゴリカル回帰分析結果

説明変数	従属変数	Q10 今の社会への満足度					
		非行少年 (N=713)			若年犯罪者 (N=370)		
		ベータ	標準誤差	F	ベータ	標準誤差	F
Q1 家庭生活への満足度		0.27	0.04	60.41**	0.27	0.05	29.32**
Q3 友達づきあいへの満足度		0.07	0.04	3.75*	0.15	0.05	8.23**
Q27 自分の生き方への満足度		0.27	0.04	57.88**	0.17	0.05	11.51**
		予測モデル		26.14**	予測モデル		10.73**
		重相関係数		0.45	重相関係数		0.44
		決定係数		0.21	決定係数		0.19

注 調査対象者のうち、本質問への回答に欠損値のあるものを除く。